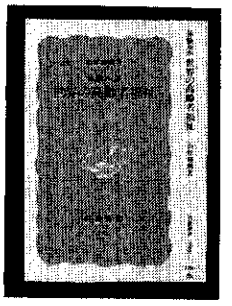
〈書　　評〉

体験ルポ　世界の高齢者福祉
山井和則著　（岩波新書186）
新書版　226頁　岩波書店　1991年



著者は工学系を専攻した，医療にも福祉にも素人の青年である．日本の特別養護老人ホームを皮切りに，タイトルにあるごとく「体験的に」インド，イギリス，スウェーデン，デンマーク，アメリカ，シンガポール，バングラデシュの老人ホームで実習をした．この約8カ月間の海外実習の旅の動機は，日本の老人ホームで目撃した「人生の最後を寝たきりで過ごさなければならないという現実」を自分自身が受け入れることができなかったからという．

本書では体験した各国の高齢者福祉を紹介した後，章を改めて世界で最も高齢化が進んでいるスウェーデンの社会を特に取り上げ，この国がどのようにして今日に至ったかをみて，日本に何が学べるかを考察している．そして最終章で脱「寝たきり大国」のためにと題して著者自身の旅の結論ともいうべき考えが述べられている．

イギリスやデンマーク，スウェーデンでは，高齢者の自立心の強さ，90歳を越えた老人にも自立への援助を惜しまない介護のあり方，自分にできる小さなことを長年月にわたって提供し続けるボランティア活動，「心」を次代に伝えるための小中学校の教育，生活全般にわたる高齢者本人の自己決定の尊重，使い慣れた家具や好みのペットを持込める施設の柔軟性，本人の努力とよい介護の結果として「寝つかずに生活し，ある朝ポックリ死んでいる」という最期の迎え方，これらを「社会サービスとして国民全員が受けられる当然の権利」であると位置づける国民の認識など，日本の施設や行政ではまだほど遠い姿があった．

一方アメリカでは，高齢者だけの街，子どもの転勤に合わせて気軽に家ごと移動するモービルハウス，ある意味で快適な（気楽で犯罪からは安全）それらの家を獲得していても，いよいよ介護が必要になれば行き着くことになる老人病院や老人ホーム，それらのほとんど総てが営利企業経営のシルバービジネスである．ある老人ホームでは痴呆症の老人が，病院がけがをさせたと家族から訴訟を起こされない「安全のため」に車椅子に縛り付けられている．しかも，これらの施設を利用するには莫大な経費がかかり，行政の保護を受けていない「中流階級」は老後の破産におびえなくてはならない．

日本でも今やシルバー産業が盛んである．わが国有数の銀行・商社・建設などの企業が高齢者対象の事業をあれこれ工夫し売り込んでおり，国や地方の行政もそれを歓迎している傾向は否めない．その上，日本人が自負しているように日本は「中流」がほとんどを占める国である．今後のあり方を賢く選択しないと，中流日本人の老後は酷い状態になろう．

国々を回って学んだ実感として著者自身も述べているが，各国の高齢者福祉のあり方は，どれが「良い」「悪い」ではなく，要は日本独自の高齢化への対応を考える上で，各国から何が学べるかということである．

この本ははじめに述べたように，若い市民が市民としての感覚で感じ，体験したリポートである．施設でボランティアとして実習させてもらいながら，施設職員や入所者やその地で生活する日本人など，種々の人々に次々と質問し，その人の考えを問い，関連のデータを調べて自己の認識を深めていく方法は，読者を同じ過程に導き納得させる力がある．高齢者を介護する職員や高齢者自身の側に立った視点がどの国の取材にも統一されており，本書の記述を好感の持てるものにしている．

各国の高齢者問題や福祉を系統的に学ぶためには他に適当な本もあろうが，いま日本人の一人一人が自分自身の望ましい老後を考え，自分の生活する地域や国の高齢者施策のあり方を選択しなければならない時に，公衆衛生に携わる者として，地域の人々と共に考えるきっかけにこの本を活用してはどうだろう．そういった意味も含めて，一読をお薦めする．

植田悠紀子（公衆衛生看護学部）